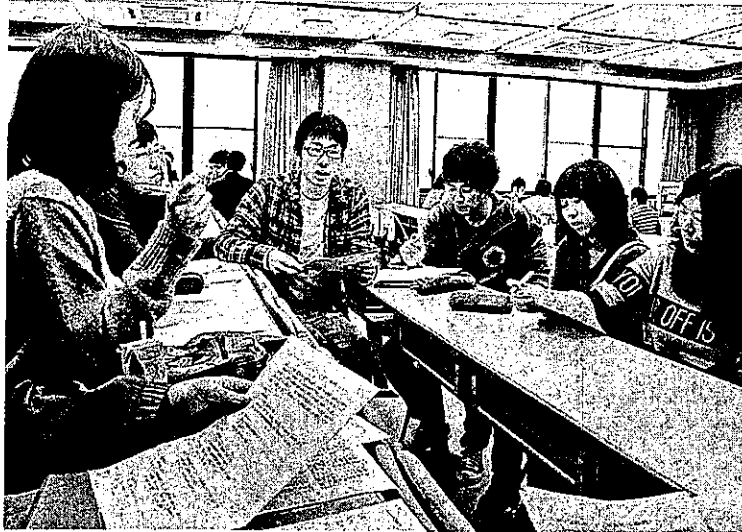


宗教者との連携に向け

滋賀医大「医の倫理」僧侶と合同講義



国立滋賀医科大学 医療と宗教の連携を考
講義が行われ、医学科、看護科の4年生100
(大津市)で11月11日、える「医の倫理」合同

講義が行われ、医学科、看護科の4年生100人が、学外から参加した超宗派の僧侶46人と緩和ケアについて語り合った。

「医の倫理」は、早島理・龍谷大学大学院実践真宗学研究所教授(北海道蘭越町・大成寺住職)が滋賀医大教授時代、医療と宗教の連携について理解を深めてもらおうと、鹿児島で緩和ケアチームに宗教者として加わる長倉伯博さん(鹿児島市・善福寺住職)を講師として招いて始めたもので、今回が10回目。医学科生は必修科目と

「医の倫理」は、早島理・龍谷大学大学院実践真宗学研究所教授(北海道蘭越町・大成寺住職)が滋賀医大教授時代、医療と宗教の連携について理解を深めてもらおうと、鹿児島で緩和ケアチームに宗教者として加わる長倉伯博さん(鹿児島市・善福寺住職)を講師として招いて始めたもので、今回が10回目。医学科生は必修科目と

単純に希死念慮と結論 ちが少しでも温かくな 付けないでほしい。体 の痛みもつらいが、ス ピリチュアル(根源的) な痛みもつらい。だか らこそ医療と宗教の両 面からのアプローチが 必要」などと話した。

これを受け、長倉さ んが経験したスピリチ ュアルな訴えの症例を もとに、医師、看護師、 僧侶の多職種チームで 真剣な議論を行った (写真)。

「眠れない」という 症例に対しては、医学 生が睡眠導入剤を使用 すると、僧侶は「まずは 患者さんの気持ちを受 け取り、一緒に考えて いこう」とする立場を 話し、さまざまな視点 があることを学生と僧 侶が共に学んだ。